

No.3020

英領ビルマにおける「人種/民族」・「宗教」をめぐる
キリスト教的動態の諸相の解明:1860-1915

上智大学大学院 グローバルスタディーズ研究科
特別研究員
藤村 瞳

助成対象期間の一年目となる 2019 年度は、三度の海外調査を実施し、文書館での史料の収集を行った。一部の史料については内容の分析もすすめた。

まず、8月から9月にかけてアメリカ・アトランタに赴き、米国バプテスト歴史協会文書館にて史料の閲覧・収集を行った。米国バプテスト派宣教史料を最も網羅的に所蔵する同文書館では、ポー・カレン語史料およびビルマ語宣教史料を多く閲覧した。具体的には、ビルマ語史料『Burmese Messenger』の1887年から1914年2月発行分を閲覧および収集が成果として挙げられる。同新聞の分析からは、「民族」という概念や用語の参照が1900年代後半からみられた点や、ビルマという国の成員という自意識が世界伝道の動きのなかで新たに生じ始めていたことが現時点では指摘できる。

2019年12月と2020年2-3月にかけて、ミャンマーでの文献調査を実施した。各調査は1週間、2週間の期間で行った。どちらの調査でもヤンゴンのミャンマー国立文書局を訪問し、19世紀後半から20世紀初頭の植民地行政文書を閲覧・複写した。合計23点の史料に目を通した。その結果、まず1880・1890年代に英領ビルマ政府が植民地行政システムや教育制度において、どのように少数派のカレン語話者を位置づけ取り扱ったのか、その傾向を掴むことができた。1880年代後半から地方役人や行政官の職に就いた者の昇進審査で課される語学試験に、多数派言語であるビルマ語に加え、カレン語試験も導入された経緯がわかった。その他、測量技師として、ビルマ人とカレン人を登用する許可を申請する通信記録や、1887年に各都市でカレン特別警備隊が編成されたことも確認できた。1880年代に植民地行政システムや治安部隊組織においてカレン語話者枠が出現し始めたといえる。この点について、1881年に結成されたカレン民族組織・カレン民族協会(KNA)の働きかけが作用した可能性が推量できるが、具体的な言及は確認できなかった。この点は、今後の研究調査の課題としたい。